

## 『モンゴル佛教史』 著作時におけるモンゴル地域の仏教伝播について

大正大学非常勤講師 新藤篤史

『モンゴル佛教史』は、1819年にツェンベル・グーシ<sup>1</sup>によって著作された当時のモンゴル地域における仏教伝播の状況を伝える文献である。これまでにチベット語版とモンゴル語版が確認され、チベット語版の翻訳には、フート訳[1896]、橋本光寶訳[1940]、ウルジー訳[1990]、テルビシ訳[1997]があり、モンゴル語版の翻訳には、大正大学総合佛教研究所モンゴル佛典研究会訳[1990-2019]がある。関連研究では、近年、窪田新一[2017]によって、『モンゴル佛教史』が現遼寧省阜新県モンゴル族自治旗の瑞応寺(dga' ldan dar rgyas sgrub gling)<sup>2</sup>において著作されたものであることが確認された。

本研究では、さらに『モンゴル佛教史』がなぜ19世紀初頭に瑞応寺において著作されたのかを明らかにしたい。これは、『モンゴル佛教史』の著作された意図や、成立の意義を把握するうえでも重要である。そして、従来あまり深く掘り下げられなかった『モンゴル佛教史』の内容自体の研究に繋がる作業ともいえる。それでは、まず『モンゴル佛教史』著作当時におけるモンゴルの仏教伝播の状況を知るために、当時の仏教僧や彼らが行った仏教儀礼(灌頂等)や導入した教義(仏典等)について検討していくことにする。

『モンゴル佛教史』では、著作当時の清朝皇帝・嘉慶帝(1760-1820, 在位:1796-1820)が帰依したされる仏教僧として、ジャンジャ4世=イシ・ダンビ・ジャルサン<sup>3</sup>、アグワン・トゥブデン・ワンチュク・バルダン・ティンレー・ジャムソ<sup>4</sup>、ジグメッド・ナムハイ<sup>5</sup>の名があげられている。さらに、歴代の清朝皇帝(乾隆帝まで)が招来した仏教僧として、バソ・ジェードウン<sup>6</sup>、ツァンポ・ミンドル・ノモンハン<sup>7</sup>、トガン<sup>8</sup>、ドンコル<sup>9</sup>、アジャ<sup>10</sup>、アグワン・バルジョル<sup>11</sup>等の名があげられ、これら歴代の転生僧たちによって、漢地、マンジュ、モンゴルに仏教が広く伝播したとある。

モンゴルにおいては、ハルハ、トルグート、アルシャン、オールドス、フフホト、チャハル、スニッド、アバガ、ドルベド、バーリン、ホルチン、アオハン、ナイマン、オンニューード、ジャルード等に伝播したとあり、その仏教の導入がどのようにしてなされたかの一例として、ジャムヤン・シャドバ2世=ゴンチグ・ジクミド・ワンボ<sup>12</sup>の事績が大きく紙幅を割く形で記載されている。

ジャムヤン・シャドバ2世は、ラブラン・タシキル寺(現甘肅省南部)の転生僧であり、1760年代から漢地や内モンゴルを巡錫する際、多くのモンゴル王侯からの招請を受けた。主な事績としては、1769年にトゥメトのザサク・ベイセ(札薩克貝子)=ハモグ・バヤスゴラントから招請され、翌1770年まで及んだトゥメト駐錫(\*諸灌頂の授与)があげられる。また、1770年にモンゴルジンのペイレ(貝勒)=ソドノム・バルジョル<sup>13</sup>および瑞応寺のホビルガン=チャガン・ディエンチから招請され、翌1771年まで及んだモンゴルジン駐錫(\*『大道

次第』『七十義』の授与)もあげられる。さらには、晩年(1784年以降)におけるザヤ・パンディタ流のカンギュル(チベット大蔵経)の導入等も特筆すべき事績といえよう。

とくに、チベット仏教がモンゴルに導入されたことの意義として『モンゴル佛教史』が伝えているのは、このジャムヤン・シャドバ 2 世の事績の最後にあたるザヤ・パンディタ流のカンギュルの導入といってもいい。これは、ジャムヤン・シャドバ 2 世がラブラン・タシキル寺やクンブム・チャンパリンというようなアムド(東北チベット)の名刹に導入するカンギュルを、ハルハのモンゴル人チベット仏教僧であるザヤ・パンディタのものにした事績のことであり、これはまさに「モンゴル仏教」の正統性を示しているともいえる。

ジャムヤン・シャドバ 2 世は、チャキュン寺(現青海省海東地区化隆回族自治县)の法座にいた時、チャハルのロブサン・タシ<sup>14</sup>からザヤ・パンディタのカンギュルについて聞き知ったとされる。『モンゴル佛教史』の冒頭に「文殊菩薩サキヤ・パンチェン、衆生の聖なる主(パクパ)、法身の光(チューク・オドセル)、第二の勝者(ツォンカパ)、大悲心の主ソナム・ユンテン・ギャンツォ(ダライラマ 4 世)、聖なる救済者ザヤ・パンディタ等の前述の尊者と恩ある上師たちを讃え、礼拝せん。」とあるように、著者がザヤ・パンディタをチベット仏教の名だたる僧に並列させているところも、おそらくカンギュルの件が影響しているからであろう。

さらに、『モンゴル佛教史』著作時のモンゴル諸地域における仏教の状況を述べる段では、仏教僧の筆頭にザヤ・パンディタを据え、また著者がとくに拠り所とした僧としてチャハルのロブサン・タシ<sup>15</sup>の名があげられている。つまり、いわゆる一連のジャムヤン・シャドバ 2 世の事績の後に『モンゴル佛教史』は著作される必要があったのであり、また著作された場所はジャムヤン・シャドバ 2 世を招請したモンゴル地域でなければならなかったのである。そして、『モンゴル佛教史』の内容自体の把握には、著作当時の仏教僧についての個別研究や、ジャムヤン・シャドバ 2 世が行った仏教儀礼および取り入れた経典等の検討がこれから求められることになる。

---

1 チベット名は、ジクメ・リクペー・ドルジェ('jigs med rig pa'i rdo rje)。

2 『モンゴル佛教史』チベット版では、「dga' ldan bshad sgrub gling」。

3 チャンキヤ 4 世=イェーシェー・テンペー・ギェルツェン(ye shes bstan pa'i rgyal mtshan)

4 ガワン・トゥブテン・ワンチュク・ペルデン・ティンレー・ギャンツォ(ngag dbang thub bstan dbang phyug dpal ldan 'phrin las rgya mtsho)

5 ジクメ・ナムカ('jigs med nam mkha')

6 タツァク=バソ・ジェドゥン(rta tshag/ ba so rje drung)

7 ツェンポ=ミントル・ノミンハン(btsan po/ smin grol no min han)

8 トガン(thu'u bkwan)

9 トンコル(strong tshag)

10 アキヤ(a kyā)

11 ガワン・ペルチョル・ホトクト(ngag dbang dpal 'byor ho thog thu)

12 ジャムヤン・シェーパ 2 世=コンチョク・ジクメ・ワンポ('jam dbyangs bzhad pa 02/ dkon mchog 'jigs med dbang po)

13 ソナム・ペルチョル(bsod nams dpal 'byor)

---

<sup>14</sup> ロサン・タシ(blo bzang bkra shis)

<sup>15</sup> ジャムヤン・シャドバ2世にザヤ・パンディタのカンギュルについて助言した僧。